Mixi コミュニティ
『創作が好き!』編集
第７作品集

窓辺の
The story

小瓶の
of a small bottle

物語
of the windowsill

２０１２年６月２３日～７月２５日
テーマ企画『窓辺の小瓶の物語』
参加作品集

冒頭に寄せて

そうーさく〔サウー〕【創作】
1 新しいものをつくり出すこと。
2 文学・絵画などの芸術を独創的につくり出すこと。また、その作品。
3 つくりごと。うそ。

そうさくぶつ【創作物】
1 創作されたもの。特に、芸術作品にいう。
2 人の知的創作活動の産物の総称。
著作物・発明品・実用新案・意匠・商標など。

『創作』活動を至上の喜びとする作家が居る。
そのような作家たちのコミュニケーションの場を提供したいと開設されたのが、
Mixi内のコミュニティ『創作が好き！』である。

今回の企画は……ま、テーマ企画の一種なんですが、
これまでと同様、少し趣を変えてみました。

ちょっとここで、想像してみてください。

窓があります。

――あ、窓はどんなのでも良いですが、
手前に物が置けるスペースの有る窓でお願いします。

その窓の手前に、一本の小瓶が置かれています。
この瓶も、どんなものでも構いません。
中に何が入ってたり、刺さってたりしても構いません。

――瓶以外はダメですよ(笑)

さて、想像できましたでしょうか。
今回はその、『窓辺に置かれた小瓶』にまつわる物語を、コミュニティの皆さんに書いていただいた、その作品集となります。

長さ、ジャンル、瓶の形や色、中身の有無は自由です。
もちろん架空の話じゃなくても、実際に窓辺に置かれている小瓶についての実話をもとに、エッセイのように書かれてもOKとして募集し、その結果がこの作品集となります。

小さな瓶から始まる物語。
その広がりを楽しんでいただければ幸いです。

Mixiコミュニティ『創作が好き！』副管理人
および当イベント企画立案者
楢崎　六呂（かーる）

目次

『おはよう』（P．7～）……しちみ黒猫　作

（著者紹介　しちみ黒猫）

6月20日生まれ。猫とイルカとドライブが大好きなアラフォー世代。Niftyの時代からネット上にて小説を公開されている、ネット作家の重鎮。Mixiのコミュニティ『創作が好き！』にて管理人を務める。

著作に『シャム猫物語シリーズ』『猫目銀河シリーズ』『月と戦車』『ゆらゆらゆれる』等。

趣味はドライブとカメラ。隠し芸はピアノと占い。

『私的国語辞典その365『砂』』（P．9～）

『琥珀色の海』（P．22～）……楢崎六呂　作

著者紹介　楢崎　六呂）

1973年2月生まれ。EN『かーる』として、Mixiのコミュニティ『創作が好き！』にて副管理人を務める。

執筆作品に、『私的国語辞典』『リトライ』『サンタクロース☆クライシス』などがある。

プロレスはミーハー的に大好き。詰問と無視に弱い。

『小瓶を手探る夜』　（P．１３～）　……　茶々姫　作

（著者紹介　茶々姫）

１０月５日生まれの兼業フリーライター。その確かな文章力から紡ぎ出されるのは、重厚な作品世界。
普段は美術と家庭科の得意な看護師である。
オールジャンルについて音楽の話題には絡むが、突然音楽の話題をふられても困ってしまう元クラブっ娘。
好きなタイプは昭和の男、好きな言葉は『ちょっと休んでかない？』である。

『漂流』　（P．１６～）　……　さほ　作

（著者紹介　さほ）

１１月９日生まれ。小説だけではなく、生け花、切り絵、料理など、創作の幅の広い作家さんである。
小説のジャンルは『大人な恋愛日記』一部限定公開にするほどに官能的な作品も執筆されている。
好きな習いごとは生け花、好きな言葉は『しあわせはいつも自分の心がきめる』。
好きなアートは『ロダンの官能的な肉質が好き』。

『おはよう』（しちみ黒猫　著）

その夜、私は窓辺に小瓶を並べてみた。
なぜならば、朝に弱いからだ。
今日は一日かけて色とりどりの小瓶を集め、その中から良い色の瓶だけを慎重に選び、場所や角度を念入りにチェックしながら、片目をつむって場所を決めて並べた。
何日かかけて壁にも目印のシールを貼ってみたり、無色の瓶で位置決めの実験をしたり、意外と手間をかけてみたのだ。うまくいってほしい。思った通りに成功するだろうか。
不安と期待を胸にしまいこみながら、その夜はもう眠ることにした。

翌朝。
頭上の目覚まし時計の音で、私は目を覚ました。
まだ眠い。手探りで目覚ましを止める。いつもなら、そのまま二度寝ということになるのだけど。薄く開けたまぶたの隙間から見えたその光景に、私はすっかり目が覚めた。
東の窓に並べた小瓶に朝日が差し込み、白い壁に縦横無数の虹を描き出していたのだ。
おはよう。素晴らしい朝だ。
（了）

「私的国語辞典　その３６５『砂』」（楢崎六呂　著）

私の部屋の海に面した窓辺に、ぽつんと硝子の小瓶が置かれている。
置いたのは、３年前に他界した母だった。

４年前のことだったか、突然宮崎から鎌倉の私の部屋にやってきた母は、様々な食材や服をひとしきり冷蔵庫やクロゼットの中に収めたあと、彼女の鞄から手の平に乗る大きさの小さな瓶を取り出して、窓辺にちょこん、と置いていったのだ。
『ほら、宮崎の砂、入れといたけん』
そう言ってニンマリと笑う母を当時の私はとても煩わしく思った記憶がある。

「――もう、良いかな」
私はそう言って立ち上がると、小瓶を処分すべく窓辺に近づく。
父と母は私が中学生の頃に離婚し、私は父が亡くなる大学１年の夏まで父とともに鎌倉で生活しており、４年前に彼女がやって来るまで母とはまったく会うこともなかった。

その母が置いていった物を処分するのは忍びない気はするが、だいたい浮気して故郷に逃げ帰ったにも関わらず、謝りもしないまま逝ってしまった母を許せないままでいる私には、やはりこれは必要なものだとは思えないのだ。
「ごめんね、お母さ――んん？」
思いきって小瓶を持ち上げた私は、ふとその中に何かが入っているのに気づいた。
どうやら折り畳まれた紙片のようだ。
「――何よ。何か言いたい事が有るなら、直接言いなさいよ」
私は何に腹を立てたのか自分でも解らぬまま、小瓶をキッチンまで運んで中身をシンクにぶちまけると、微かな海の薫りが私の鼻をくすぐった。
そう、鎌倉の海とはどこか違う、懐かしい薫りが。
「――気のせい、よね」
私は苦笑いとともにつぶやくと、何気なくシンクを覗き込む。

私は間違いなく雑にぶちまけたはずだったが、長年放置されていたためか砂は散らばることもなく、シンクの中央に小さな砂の山を作っており、先程の紙片がまるでお子様ランチの旗のように、山の頂きに突き刺さっていた。

「――そんなに主張しなくても、見てあげるわよ」

ほんとにもう、とため息ひとつついた私は、

紙片をつまみ取り、四つ折になったそれを拡げ――

そして、絶句した。

紙片には母の下手くそな字で、こう書かれていた。

『ごめんね。駄目なお母さんだったね』

「――ほんと、ダメダメだったよ」

私はぽつりとつぶやくと、沸き上がる涙を堪えるように、紙片をきつく抱きしめた。

（９３０文字）

すな［砂］

岩石が風化してできた細かい粒。すなご。いさご。

（ア）

「小瓶を手探る夜」（茶々姫　著）

手に取るもの全て、こぼれ落ちてしまいそうだ。
ベッドで目が覚める。俺のほっぺたに女の髪がまとわりついている。
暗闇で手を伸ばすと、頭より少し高い窓辺に小瓶がある。俺はベッドから上体を起こし、手探りで小瓶を取り、小瓶の白い粒を少しだけ口の中に注いだ。白い苦みを飲みかけのウォッカで流し込み、また床に就いた。隣でぐーすかイビキをかいている女は明日にでも放り出す。明日にはこの粒も底を尽きるだろう。
目覚めてシャワーを浴び、フライドチキンにマスタードをたっぷりつけて食ってやった。脳みそが左右に揺れる。今朝の震度は2か1くらいだろう。揺れたついでに頭に鋭い痛みが走った。また小瓶を開けて白い粒を口に含む。
これは、セデス。頭痛薬のセデスだ。セデスの顆粒は依存性があり、覚醒剤ほどではないが、ハイになる副作用もあり、15年以上前に製造中止となった。錠剤ならいまでも薬局で売っているが、顆粒が悪さをするらしく製造・販売中止となった。

製造中止になっても、裏で探せば案外と手に入る。
俺は立派なセデス依存症だ。マスターベーションとセデス、どっちを取るかと言われたら、迷った末にセデスを取る。
それがどうやら、このセデス顆粒も底を尽きた。今までセデスを安値で譲ってくれていた連中が、セデスの代わりに覚醒剤を勧めてきた。もう、セデスは扱わないとのことだ。
この小瓶に入れて日の当たる場所に飾っておけるのも、今日でおしまいさ。
明日からは言われるがままに、白い砂に変わり、小袋に入れて闇に隠し持つことになるのだろうか。くだらない。
なあ、なんで俺は、こんなものを小瓶に入れて部屋の窓辺に飾っているんだろうな。
自分に聞いてみても返ってくる答えは知っている。

寝てるときに見上げていたいからだよ。

金持ちは高いところに住みたがる。上をみりゃ、キリがないのに、上へ上へと競い合い、上しか見上げていない。人より頭一つでも高いところをってか？　あいつら、上ばっか見てるから、下にいる人間のことなんか、目に入らないんだよ。

でも、この小瓶が俺にとっての頭上だ。こんなちんけな小瓶だ。中は痛み止めの白い顆粒。昨日まで「こいつがなきゃ」と、頭をおさえつけられながら働いてはいたけれど、いくらでもぶち壊すことのできる、俺の高いところなんだ。

瓶をとって蓋を開け、最後の粒を口に流し込み、ぬるい水で飲み干してから、小瓶を指で弾いて放り投げてやった。ちょうど昨日連れ込んだ女が吐いて倒れている吐物の上に逆さに突き刺さった。俺が超えられなかったものは所詮、こんなものだ。

ここは高層ビルの45階。借り物の部屋だ。明日には出て行く。そして、そこからまた、積み重ねるさ。

手に取るものすべてが液体のようにこぼれ落ちる金であろうが、時間であろうが、哀しみであろうが、また、積み重ねればいいだけさ――。（了）

『漂流』（さほ　著）

殺風景な部屋なかで
唯一雑貨らしいものがある
窓から差し込む光に
反射して色とりどりの模様ができる
硝子の瓶
そうだ
流しに行くんだった

目の前に広がる海に
毎朝のように
ケメと散歩する
人もいない早朝に
リードを離し
心置きなく走らせるのが
柴犬ケメの日課

その日も
リードを離し
ちぎれそうな位の勢いで
尻尾を降り
飛び出していった
くるくる回りながら
引き寄せる波と遊んでいると
何かを見つけたのか
しきりに呼んでる

くわえたものを
手に取ると
手紙が入った硝子の瓶だった

つたない文字で
『つながり』と、
書いてあった

何か
感動のような
こみ上げる温かいものを
感じた

また
同じように
手紙を入れて海へ流そう

そして

見知らぬあなたへ

繋がりを…

（了）

『琥珀色の海』（楢崎　六呂著）

「――客、こねえなあ」
突然つぶやいたタックの声に、カウンター越しにカップを拭いていたジェンヌが顔を上げる。
「そりゃそうよ。誰が好き好んで、こんな真夏日の午後に、冷房も効いてないカフェに来ると思う？」
ジェンヌの呆れ声に、タックもそりゃそうか、と苦笑いしつつ、手元のカップを口に運ぶ。
うん、旨いとつぶやいた彼に力無く微笑みながら、ジェンヌの視線は入り口脇の出窓へと向けられる。
白木で作られた窓には、その格子で均等に区切られた海が、その上に浮かぶヨットとともに、穏やかな姿をさらしている。
窓の向こうから押し寄せてくる、まるで一枚の絵画のような光景に、彼女はただ静かに目を細めて魅入っていた。

「なあ、ジェンヌ」
タックの穏やかな口調に、窓を見つめたまま、なに？とジェンヌは応える。
「まだ、待ってるのか」
タックの突然の問いに、ジェンヌは驚いた様子で視線を彼に向ける。
「なによ突然、どうしたの？」
「いや、またアレを見てたみたいだったからさ」
彼はそう言うと、ちらりと視線を窓に向ける。
彼女は不思議そうに彼の視線を追い、そしてすぐに理解した。
彼は、窓と言うよりも、窓の手前に置かれていた小瓶に目を向けていたのだ。
あの、中に何も入れられていない、イルカの形をした硝子の小瓶に。

「――ああ、いえ、違うわよ」
ジェンヌは苦笑いとともに首を横に振る。
「私はただ、海を見てただけ。それ以上でも、以下でもないわ」
彼女の答えに、タックはそうか、と力無く笑うと、再びカップを口に運ぶ。
既に冷めきっているはずの珈琲の渋味が彼の喉を刺激したのか、彼の眉間に皺が寄ったのを見て、ジェンヌは何も言わずにドリップパーへと手を伸ばした。

「――あれから、3年か」
しばらくの静寂ののち。
フラスコから漏斗へと移り行くお湯を眺めながら、不意にタックがつぶやく。
「そうね。まだ3年しか経ってない」
ヘラを持ったジェンヌが、彼と同じようにフラスコを眺めながら言葉を返す。
その答えに、彼はその皺だらけの顔を苦しげに歪ませた。
「――まだ、だって？」
彼の苦しげな問いに、彼女はきょとんとした表情で顔を上げた。
「奴は――マイクは、もう帰ってこねえんだ。お前さんも解ってるだろう？」
苛立たしげに告げる彼の言葉に、しかし彼女は力無い笑みを浮かべるしかなく、それが彼をさらに苛立たせる。
「戦争はもうとっくに終わったのに、お前さんはまだあんなただの小瓶を後生大事に飾ってるのか」
タックはカウンターを乗り越える勢いで感情を吐き捨てるが、彼女はまるで聴こえていないかのように平然とした様子で、漏斗にヘラを入れてステアしていく。

「『亡くした方への後悔をいつまでも引きずってると、浮かばれるものも浮かばれませんよ』って言ったのはどこのどなたさんでし――」
「――6年」
タックの言葉を遮るように、しかし静かな口調でジェンヌが口を開く。
「6年？」
突然出てきた数字に、タックが怪訝そうな顔で漏斗からヘラを抜く彼女を見つめる。
ステアを終えた後の漏斗から滴り落ちる琥珀色の液体に窓から差し込んでくる日差しが反射し、液体がまるで宝石のように輝いていた。
「ニッポンでは、大切な人が亡くなって6年経つと、『ナナカイキ』って言うお祈りをするんですって」
「ナナカイキ？」
タックの不思議そうな声に、彼女はマイクが教えてくれたの、と微笑みながら窓の小瓶を見つめる。
「可笑しいわよね。6年目なのに、7回だもん
――あの小瓶はね、彼のニッポン土産なんだ」
彼女の言葉に、タックもつられて小瓶へと目を向ける。

「オオサカ、って街の大きな水族館に視察に行ったとき、買ったんだって」
「オオサカ、ねえ……」
日本という国を知らないタックがぼんやりとした声を返すと、彼女もわからないわよねえ、とくすり、と笑う。
「その時に知り合った女の子から聞いたんだ、って言ってたんだ」
「何だよ、そんな話か」
タックの呆れ声に、彼女はフラスコに溜まった琥珀色の液体をカップに注ぎながら、クスクスと笑う。
「でもね、3年前、彼の探査船が沈んだって聞いたときから、ずっと彼の言葉が頭から離れないのよ」
最期の会話だったしね、と話す彼女の笑顔は、それでもどこか寂しげに見える。
「だからかな、あの小瓶は、まだ片付けられないんだ」
彼が好きだった海だからかな、と苦笑いした彼女を、カップから上り行く湯気がゆらり、と揺らすのを、彼は静かに見つめ続けた。
（了）

コミュニティ紹介

Mixi コミュニティ『創作が好き!』

創作が好き、何かを作るのが大好きなひと、いらっしゃいませ。

文芸文学、SF やファンタジー、詩や川柳。絵画やイラスト、立体作品、写真やインスタレーション。音楽や歌詞。ケーキやお料理まで、なんでも歓迎。
とにかく「創る」人のためのコミュニケーションを支援し、その情熱を応援します。

(コミュニティスペック)
開 設 日 ： 2012 年 02 月 20 日
管 理 人 ： しちみ黒猫
副管理人 ： かーる
カテゴリ ： 趣味
参加条件と公開 ：
レベルだれでも参加できる (公開)
トピックの作成権限 ：
参加者が作成できる
コミュニティurl ：
http://mixi.jp/view_community.pl?id=5922574

Mixiコミュニティ『創作が好き！』編集
作品集
『窓辺の小瓶の物語』

編者　楢崎　六呂
2012年7月26日　第一刷発行

なお、本紙に掲載された著作物は、それぞれの著作者に著作権を有します。